

『#PLAN 75』(2022年：早川千絵監督)をNHK BSで視聴した。本作は、日本・フランス・フィリピン・カタール合作。主演は倍賞千恵子(年とっても品がある)。第95回アカデミー賞、国際長編映画賞日本代表作品。数々の映画賞を受賞。

舞台は高齢化問題で苦悩する架空の現代日本。75歳以上の高齢者に対して自らの生死の権利を保障し、支援する制度「PLAN 75」が施行されている。この施行に伴う制度の対象者たちや市役所の職員、スタッフの苦悩を描く。私も他人ごとではない年齢に近づいてきた。

78歳のKは身寄りのない未亡人だが身体は丈夫で、ホテルの客室清掃員として働いていた。しかし、高齢を理由に解雇されても、次の定職を見つけられず、生活保護にも抵抗のあるKは、ついにプラン75を申請した(10万円もらえる)。プラン75の職員である青年Aは、窓口で無料の「合同プラン」(他人とまとめて火葬・埋葬されれば、葬式や墓の費用の心配がないコース)について穏やかに説明していた。そんなAの窓口で20年間も音沙汰のなかったAの叔父Yが現れる。Yはプラン75を心待ちにして、75歳の誕生日に申し込みを行っていた。そして多少の動揺を見せつつも、死に場所の施設に(鎮静後、毒ガス死)向かうY。隣の台で静かに死んで行くY。Yを止めようと施設を訪れるA。だが、Yは既に亡くなっていた。せめて火葬は合同ではなく身内として行おうと奔走するA。東南アジアから娘の手術代を稼ぐために日本で働く女性がそれを手伝う。死に場所の施設で診察台に横たわるK。酸素マスクからガスが流れれば、眠りに落ちて死亡するはずだった(手違いからKのマスクにはガスが流れなかった)。生き残ったKは施設を抜け出し、きれいな夕映えの中を歩き出す。生き延びてもきれいな夕日を堪能する日が返ってくるのか。

日本の高齢化対策

高齢化の現状

- 2021年時点で高齢化率は28.9%
- 2065年には高齢化率が38.4%に達する見込み
- 少子化と平均寿命の延伸が主な要因

政府の基本方針(高齢社会対策基本法に基づく)

- 年齢による画一化の見直し:「エイジレス社会」の実現を目指す
- 地域コミュニティの整備:どの段階でも安心して暮らせる基盤づくり
- 技術革新の活用:介護・医療・生活支援にテクノロジーを導入

国際的な視点

- フランスや英国では「孤独対策」や「地域資源の活用」に重点を置いた支援が進行中

高齢者の排除・姥捨てを描いた映画

○檜山節考 (1958 / 1983) :

深沢七郎の小説を原作に、70歳を迎えた老女が「檜山参り」と呼ばれる姥捨ての風習に従い、山へ向かう。1983年版は今村昌平監督によるリアリズム描写が話題に。

○The Gleaners and I (2000) :

アニエス・ヴァルダ監督によるドキュメンタリー。高齢者や貧困層が廃棄された食料を拾う姿を通じて、社会の「見捨てられた人々」に光を当てる。

○老人Z (1991) :

高齢者介護をテーマにしたSF作品。介護ロボットが暴走する中で、社会の高齢者への向き合い方を風刺的に描く。

○Amour (愛、2012) :

高齢夫婦の介護と死を描いたミヒャエル・ハネケ監督作品。見捨てるというより、愛と苦悩の中での選択が問われる。

○Soylent Green (1973) :

食糧危機の未来社会で、高齢者が「安楽死施設」に送られる描写がある。ディストピア的な姥捨てのメタファー。